

# 平成28年度 全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立七九州市立江戸小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成28年4月19日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語, 算数)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

#### (1) 教科に関する調査(国語, 算数)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
<ul style="list-style-type: none"><li>・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容</li><li>・実生活において不可欠であり、常に活用できるようにになっていることが望ましい知識・技能</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力</li><li>・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力</li></ul>

#### (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

### 3. 教科に関する調査結果の概要

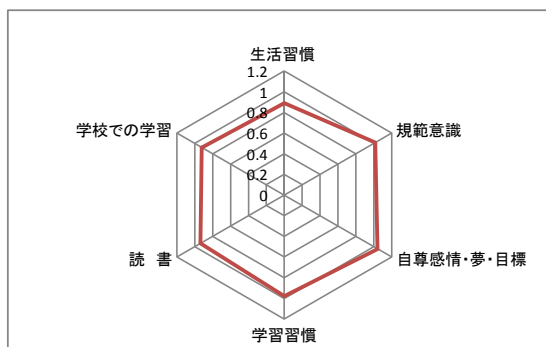
#### (1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 算数A・B)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	10.4	70	5.6	56	12.1	76	5.8	45
全国	10.9	73	5.8	58	12.4	78	6.1	47

#### (2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	・「目的や意図に応じて収集した事柄の整理」「人物像の読み取り」は、できていた。漢字やローマ字が確実に習得できるよう、日頃から使っていく必要がある。学習形態の工夫(ペアやグループなど)や的確な視点の提示が必要である。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	目的や意図に応じて、書く事柄を整理する問題、根拠となる表現を基に登場人物の人物像をとらえる問題は、正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	書き手の表現の仕方をよりよくするために助言する問題や漢字・ローマ字の正答率が低かった。ローマ字は無回答率が高かった。	
国語B	全体的な傾向や特徴など	・無回答率は下がってきた。全体的に全国平均正答率を下回った。 ・目的や意図に応じて資料を基に考えを書いたり、チャートや付箋活用で質問したいことを整理したり、複数の本を比べて読んだり、文章全体の構成の効果を考えさせたりするなどの学習活動を工夫していく必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	質問の意図をとらえる問題は、比較的できていた。	
	努力が必要な問題	目的に応じて、質問したいことを整理したり、活動報告文において、課題を取り上げた効果をとらえたりする問題は、正答率が低かった。	
算数A	全体的な傾向や特徴など	・全国平均正答率を下回っており、百分率で表した割合や小数の意味と大小、図形の問題において、特に課題があった。 ・計算は、概ね正答率が高かったが、繰り下がりのある減法に課題があった。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	小数の除法の計算や、除数が1より小さいとき商が被除数より大きくなることの理解がよくできていた。	
	努力が必要な問題	百分率を用いた図に表すとき、基準量と比較量の関係を数値で正しくとらえたり、小数や整数の混ざった中で数の大小を考えたり、三角形の底辺に対応する高さを考えたりする問題は、正答率が低かった。	
算数B	全体的な傾向や特徴など	・図形について式や言葉で説明する問題は、全国正答率を上回った。 ・式の意味を考えたり、表やグラフから読み取ったことを根拠に理由を記述したりする力を付けていく必要がある。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	正方形の縦と横の長さを変えたときの面積について、言葉と式で説明する問題は、正答率が高かった。	
	努力が必要な問題	示された情報を基に立式する問題、式の意味を解釈する問題、理由を記述する問題、表を基に読み取れないことを特定する問題などは、正答率が低かった。	

### 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析
<p>話合い活動や書く活動に苦手意識をもつ児童がいるので、充実させていく。振り返る活動は、高学年を中心に取り組む割合が高くなってきた。総合的な学習の時間の学習活動の見直しをはじめ、児童が主体的に学習に取り組む力を身に付けさせていく。①自尊感情が高い。②将来の夢や目標をもっている。③人の役に立つ人間になりたい。このような高い志をもって、将来に向かって生きていこうとする児童が多いので、よさを生かした指導をしていく。読書への興味や十分に費やす時間、図書館の利用頻度は、全国平均に比べ若干低い。30分以上費やす児童を含めると全国平均並みである。複数の本を比べて読むなどの機会を設定する必要がある。就寝時刻は、全国平均に比べ若干、不規則な傾向があるが、起床時刻は、規則正しい。家庭学習の時間や計画性は、全国平均に近付いてきた。宿題を確実にしている児童の割合は高いので、一層の意欲付けや家庭との連携をしていく。</p>

### 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

#### ① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

学習支援、児童支援、担任外、教務主任などが、朝自習の時間や授業時間、放課後、日常の隙間の時間などに個別の支援にあたる。学年会で共通理解をしながら、話合い活動や書く活動、振り返る活動を充実させたり、計画的に読書案内などに取り組んだりする。また、実生活や他教科等の学習における使用も含め、漢字やローマ字を確実に習得させる。資料から読み取ったことを根拠に理由を記述したり、文章全体の構成の効果を考えたりする力を付けていく。

#### ② 家庭生活習慣等に関する取組

学力・体力に関する本校児童の実態や指導の方向性について、通信を発行したり、懇談会などで周知したりすることで、保護者との共通理解を図り、主体的な家庭生活習慣の定着(1年生10~20分、2年生20~30分、3年生30~40分、4年生40~50分、5・6年生1時間以上)に努める。